

教育改革と言われて久しい。なぜ改革をする必要があるのか。それは、日本社会や世界が、現在のようにどんどん変化しているからであろう。一つのキーワードとして、今まで以上に自律を育む教育が必要になってきている。

日本の大きな課題の一つは、ここ30年間、賃金が上がっておらず、この現状を全く変えられていないことである。ちょうど私は、この30年間で教員として生きてきたことになる。日本企業の新産業への参入は進まず、ITも世界の先進国の中で後れを取っている。失われた30年と言われるが、教育とは関係がないのだろうか。

賃金が上がらない主な理由は、国全体の経済力（購買力）が上がっていない、すなわち人口が増えていないことだろう。かつて世界の時価総額ランキングでトップ50社のうち10社以上を日本企業が占めていた時代は、人口も順調に伸びていた。したがって、物をつくれれば売れていた。誰かが成功するビジネスモデルがあれば、それを真似することで成功できた時代だった。

人口の増加が止まり、購買力が下がったことで、企業は商品を安く売らなくてはいけなくなり、当然、労働者の賃金が減って労働環境が悪くなっていく。だから、日本企業においては、高くものを売る力、つまり自分自身で考え、行動し、付加価値の高い仕事をする能力をつけなくてはならない。だが、教育は依然として旧来のままになっている。ものを考えなくてもよかった時代の教育を子どもたちにしてはいけない。

逆に、ニーズがあるにもかかわらず、不採算になることなどを理由に、誰も参入したがないような仕事にも目を向け、自分たちでアイデアを生み出し、他人とコラボレーションをしてビジネスに変えてくような子どもたちを育てていかなければならない。

現在のような飽食の時代に、宿題やテスト、塾通いの機会を与えられ続けている子どもたちは、もはや自分では学びたいと思わなくなっているのではなかろうか。だからこそ、自己決定・自己選択ができる子どもたちを育成しなければならない。

中学校に勤務しているため、中学校の授業を見る機会がある。授業は少しずつ変わってきてはいるが、見るからに変わったのは英語科ぐらいではなかろうか。ほとんどの教科は、根本的には変わっていない。そう簡単に授業スタイルを変えることができないのは理解できる。

だが、授業の中に自己決定・自己選択の場を設けることはできる。授業以外の場でも、自己決定・自己選択の場面は学校生活の中に意外とある。それを教師からの一方的な指示や指導により奪ってはいないだろうか。これは、目の前の生徒をどのように育てたいのかという問題と大きく関わる。生徒を自律させたいと思っているかどうかである。

もう、今までのようにはいかないのは明らかである。教育改革とは、制度を変えることも重要だが、教員の発想や考え方を変えることのほうがもっと大切である。教員にこそ主体的な姿勢が求められる時代になってきた。